

“こども病院ボランボラコの会” 全国交流会

コロナ禍における活動状況

—麒麟福祉財団助成事業—

ボランボラコ新聞

こども病院ボランティアとコーディネーターの会

第13号発行 2023.3.30
事務局 新宿区若松町10-1-302
080-5527-4379
代表 坂上和子



全国交流会開催報告

坂上和子（ソーシャルワーカー）

コロナ禍にあって丸3年。よその病院はどうしている？ ボランティアたちは病棟の子どもたちや家族のこと、医療スタッフのことを心配していました。「病院とボランティアが話し合おう」、そんな声から開催されました。参加者58人（会場38人、Zoom20人）。実は病院で活動するボランティアと病院のコーディネーターらが一緒に意見交換をするのはこれが初めてです。コロナ禍で病院のボランティア活動はどこも休止に追い込まれていました。だからといってボランティアは何にも出来ないのか？ どっこい!! めげずにいろいろな形で奮闘していました。6人の登壇者の発言を裏面にまとめました。リモートでイベントを配信したり、手作り工作キットや家で出来ることを病院に郵送したり、コロナ禍で働く医療者応援サラダが現れたり。「こども病院ボランボラコの会」はそうした各地の取組をこれからも発信し、こども病院の療養環境の向上について考えていきます。この度は神奈川こども医療センターの協力と麒麟福祉財団の助成により開催されました。ありがとうございました。

こども病院ボランボラコの会 コロナとボランティア これからを考える交流会

会次第（順不同・敬称略）

- 13:00 開会のことば
こども病院ボランボラコの会代表 坂上和子
- 13:05 あいさつ
神奈川県立こども医療センター病院長 後藤裕明
- 13:10 各団体からの活動報告
司会：湘南鎌倉医療大学准教授 米山雅子
①こども病院ボランボラコの会 富澤真麻
②オレンジクラブ 三木美雪
③ボランティアグループにこにこトマト 高谷恵美
④スマイリングホスピタルジャパン 松本恵里
⑤絵本カーニバル 坂本真弓
⑥日本ホスピタル・クラウン協会 大棟耕介
- 14:10 ポスター紹介
- 14:20 意見交換会
司会：米山雅子、加藤悦興
- 15:10 感想まとめ
湘南鎌倉医療大学教授 野中淳子
- 15:20 閉会のことば



上段左から①オレンジクラブ（神奈川）②ひだまり（沖縄）③ボランティアの会（埼玉）④こどもの力（東京）⑤活動紹介（静岡）⑥にこにこトマト（京都）
下段左から①ホスピタルフットボール（大阪）②ぽんぽこぼん（大阪）③病院珊瑚プロジェクト（大阪）④病気の子ども支援ネット（東京）⑤活動紹介（愛知）⑥スマイリングHJ



コロナ禍ですがこんな活動
やっています!! ポスター展示

会場からの声

- ・こんな中だからこそ情報交換が必要だと思う
- ・他施設の話が自施設の参考になった
- ・これからも情報交換をしたい
- ・様々な取り組みを知れた
- ・音声の問題は残念だった
- ・参加できてありがたかった
- ・コロナ禍でも子供が成長するための活動を病院に知ってもらいたい
- ・活動が停止しても、前向きにできる方法を考えている話や写真、映像に出てきた親子の笑顔に力をもらった
- ・まとめと質問の部分を活発にするのが良いと考える。
- ・質問をあらかじめ聞いていたのはよかった。
- ・コロナ禍でも、無理のない範囲で活動していきたい。
- ・現状は問題が山積みだが、絶やさないよう頑張りたい
- ・ボランティアコーディネーターの大切さが分かった
- ・今できることをと動いたみなさんがすごい
- ・思いを持ち続けることが子どもと家族の力になる
- ・他団体の意見を聞いて今後の励みになった
- ・今後も活動状況や注意点などを共有することでアイデアを得たい
- ・横のつながりができてよかった
- ・スライドは参考になったが音声が悪く内容が分かりにくかった（ZOOM参加）

報告者	コロナ前	コロナ後の活動の変化と工夫
富澤 真麻 こども病院ボランティアの会 (埼玉県立小児医療センター ボランティアコーディネーター)	ボランティアの会のあゆみ ①2012年”全国小児医療施設ボランティアの会”設立 ②2018年よりボランティアコーディネーターの会”へ ③2022年ボランティアとコーディネーターの会発展 各地の子ども病院を訪問し交流を深めた。視察先はあいち、大阪、宮城、神奈川、埼玉、沖縄、栃木、京都、トロントのシックキッズ他。助成金を得て組織化した。	感染の波によって病院ごとに違いがみえた。縫製や植木の手入れなどは比較的継続されたが病棟の出入りやきょうだいの託児は全面停止。待合室での活動や院内の装飾は工夫しながら継続した所もあった。病棟では廊下からガラス越しにパフォーマンスの受け入れ、Wi-Fi 環境を整えオンライン絵本読み聞かせ、医療者応援サラダを受け入れた病院もある。他施設の状況を知るためズーム会議を年に 3、4 回開いて情報を共有しあい、それをボラコ新聞に掲載して各地に郵送した。
三木 美雪 神奈川県立こども医療センター ボランティアオレンジクラブ 1975 年設立、 会員 350 名 30 グループ	病棟、外来で積極的に活動。縫製、病棟、重症、フラワーアレンジメント、お話会（ポポンタ）、飾りつけ、作業、外来、手作り、患者図書、園芸、きょうだい預かり、フラダンス、つるしびな、シャボン玉、ホスピタルクラウン、手芸、盲導犬と遊ぶ、おもちゃの病院、絵画、スマイリングホスピタルジャパンアートディスプレイ、音楽	緊急事態宣言発令中はすべてのボランティア活動を自粛。病院側と会議を通して病院の方針を確認。病棟活動停止。外来関係、ボランティア室活動は3時間に限定し活動再開。調整会議、運営会議は、オンラインに変更。Zoom を利用し病棟でお話会、イベントを行う。病棟窓越しでのクラウンパフォーマンスやフラダンス DVD を重心施設に届ける。重心衣類整理再開。きょうだい預かりは 2022 年より限定的に再開できた。季節の飾りつけは好評を得た。
高谷 恵美 京大病院小児科ボランティアグループ にこにこトマト	主にプレイルームに出られる入院中の子どもを対象に平日のほぼ毎日午後1時間から2時間ほど工作、絵画、読み聞かせ、墨遊びなど色んなジャンルのスペシャリストが直接子どもたちと接する活動をしていた。そのほか、毎週火曜日の移動文庫や季節ごとのイベントとして夏祭り、ハロウィン、バザー、カフェなども開催していた。	病室から出られない子向けの工作のキットの対象を全病児対象にし、毎月6種類のキットをそれぞれ20名分ずつ準備。事務局が院内にあるが病院からスタッフが集まる許可がない為、作業はリモートで行われており、郵送で型紙、材料をスタッフに送り、高谷自宅に送り返してもらいキットを組んで病院に届けている。メンバーは年配が多いためズームなどを取り入れにくく総会も2年程書面評決になっている。
松本 恵里 認定 NPO 法人 スマイリングホスピタル 活動先 全国の病院	2012 年 5 月活動開始。同年 12 月 NPO 法人設立。2017 年認定 NPO 法人認定。音楽、美術、文学、大道芸などプロのアーティストが参加型芸術活動を定期的に行う。神奈川県立こども医療センターで開始し 2020 年時点で北海道、宮城、茨城、千葉、東京、神奈川、静岡、長野、愛知、大阪、京都、兵庫、広島、福岡、沖縄計 42 の病院・施設で実施。2015 年より年に 1 度全国のボランティア対象の研修交流会を行い意見交換、交流を行う。	施設への単発訪問を除き訪問活動が全面中止になった。対策を話し合い「SHJ 子どもとアート研究会」、手作りキット製作部「チクチクチーム」を設立。現場の声を聞きながらオンライン訪問、アクティビティや手作りキット提供をしている。アーティスト作成動画集 YouTube スマイリングちゃんねるを公開、各活動場所でポスターを掲示いただいている。現在 126 動画。オンライン活動は8つの病院・施設で実施、年間訪問活動数、参加者数はコロナ前年実績の 540、11,622 から 0 に落ち込んだ後、それぞれ 54、776 に持ち返した。アクティビティは 24 病院に提供。
坂平 真弓 NPO 法人絵本カーニバル代表 2010 設立 活動先 全国の病院	絵本カーニバルの主な活動は、入院児や家族に向けて、日常空間である院の廊下やプレイルームを絵本で彩る。日常に変化を起こし、好奇心を育む絵本との出会いやワークショップ（工作・ゲスト WS・音楽療法）などの体験を届ける活動を全国の小児医療機関で行っている。 http://www.ehoncarnival.com/	コロナ感染拡大により一時は全面的に活動を停止となったが、各病院にアンケートで状況を確認し、徹底した感染対策のうえ、病院ごとの受入れ状況に沿った支援活動を再開している。病棟に入れない場合は展示物を輸送し病院スタッフの協力を得て展示をした。コロナ前に対面で行っていたワークショップは、オンラインの活用や、個包装にしたキットを届け個々にベッドサイドでも楽しんでもらえるよう工夫した。
大棟 耕介 NPO 法人日本ホスピタル・クラウン協会 2005 年設立。 活動先 全国の病院	2006 年 NPO 法人日本ホスピタル・クラウン協会に。小児病棟をクラウン（道化師）が定期的に訪問し、子どもの心を笑いで癒す活動。クラウンの特性である「場の空気を読み、相手を主役に引き立てる」スキルを活かし、闘病中の子ども一人一人と丁寧に関わる。それぞれの子どもの状態に合わせた和やかな空間を創りだす。	訪問自粛をした。定期訪問している病院へクラウンの面白いポスターを送った。毎日 YouTube でクラウンパフォーマンスをアップした。オンラインで小児病棟とクラウンを繋ぎパフォーマンスを届けている。また病院の子ども、家にいる家族、クラウンを繋ぎ、クラウンのパフォーマンスを観ている笑顔を似顔絵にする「似顔絵 de ZOOM」を企画し実施した。コロナによる面会謝絶で家族と会えなくなった子ども達が、オンラインで家族に会うことができ、家族そろった似顔絵は皆様に喜ばれた。

感想

神奈川県立こども医療センター
病院長 後藤裕明

まだまだ現在のコロナ禍の状況はそう簡単には終わらないように思いますが、であればこそ、情報交換の場が大切になるだろうと考えさせられた会でした。お話しの中で「子どもは成長する存在であり待つてはられない」と指摘がありました。ここが大人とは大きく違うところではないかと思えます。現在の状況が半年とか1年先まで続くのであれば、社会とのつながりが制限されたその1年が、成長期の子どものためのこれからの人生にどんな影響があるのかを考えなくてはなりません。本当に、「まあボチボチ考えていこう」などと言ってはられないような切実さがあります。一方で、病院はこどもたちの安全を守らなければなりません。コロナの強い感染力を考えると、たとえ感染症そのものが軽症であったとしても、院内で流行した時に、こどもたちの治療に大きな影響が出てしまうことを懸念しています。ですから今は「コロナ前にできたことの10分の1しか出来ない、けれども、それでもゼロじゃない」、情報交換をしっかりとやって、出来ることはやっていただけるような環境を作るのが私たちの役目ではないかと思って、今日はみなさまの報告を聞かせていただきました。

感想

湘南鎌倉医療大学教授
野中淳子

小児ボランティア活動に関する集まりから始まって11年が経過したということ、地道な歩みを重ねられてきたことに感動しています。私もこれまで交流会に何度か参加させて頂き多くの刺激を受けました。こうしたボランティア活動を地域・社会に広く知っていただくことは大事なことだと思っています。また、私は10数年前に小児医療におけるボランティア活動の全国調査を行いました。その当時はまだボランティア・リーダー・ネーターの存在がほとんど知られておらず役割も明確ではありませんでした。最近では認知度が高まり、ボランティア・コーディネーターの方7名に面接調査をさせて頂きました。コロナ禍になつて活動が減少していると単純に思っていました。けれども意外なことに「コロナになつて活動は制限せざるを得ない状況でも非常に忙しい。なぜなら色々な問い合わせや正確な情報伝達・調整・確認・互いの情報共有、そういったものが重要となり、これまでとは異なる意味で多忙等の意見も聞かれました。本日の発表でもありましたようにコロナ禍で「出来ない」だけではなく、「じゃあどうしたら出来るか、何が出来るか」ということで、みんなで知恵やアイデアを引っ張り出して、できる方法でやるう」そんな風にこの会が展開・発展しているというところにパワーを実感しました。今後子どもや家族の笑顔が絶えることのない活動を期待しています。